

Cafe プレイエルのフランス アンティークピアノ

プレイエル(1923年) & エラール(1909年)

～フランスの伝統 プレイエル & エラールのおはなし～

プレイエルの創始者、イグナース・プレイエルは 1757年にオーストリアのウィーンの近くで生まれています。なんと24番目の子供で音楽的な才能があり、あのハイドンに師事しています。その後

作曲家や演奏家として名をあげますが、1795年、パリに移り住み、楽譜出版を手がけます。

1807年、ピアノの生産事業もはじめます。**プレイエルピアノの創業**です。

1831年、イグナースの息子、カミーユ・プレイエルが跡を継ぎます。彼は優れたピアニストでした。

彼のもとで、プレイエルはエラールとともにフランスの代表的なメーカーとして発展していきます。

ところで、プレイエルといえばショパン抜きには語れません。ショパン曰く

「私は気分が優れないときは(すでに完成された音をもつ)エラールを弾き、気分のよいときは(求める音、表現を得るための心身の力があるとき)は**プレイエル**を弾く」

ショパンが祖国ポーランドを離れ、ウィーンを経由して1832年にパリに来たとき、この天才を見出し

世に紹介したのはカミーユ・プレイエルでした。ショパンがパリで行う公式のコンサートはすべて

プレイエルサロン(サル・プレイエル)で行われておます。実際にショパンとカミーユは固い絆で結ばれていたようです。

一方 **エラール**の創始者、セバスチャン・エラールは 1752年ラスブルグで生まれました。

建築学を学んでいましたが、16歳のとき父を亡くし、家族を世話するために家具職人となりました。しかし機械や機構に鋭い感性を持っていた彼は、家具職人では満足できず、パリへと旅立ちます。

パリでチェンバロメーカーに勤めると、類まれな技術力で上達し、みるみる師匠を超えて、クビになり、二軒目では、当時の職人モラルに反して、師匠の代わりにピアノをつくって、ばれてしまいましたが、逆にエラールの名が世間に広まることとなりました。その後、エラールピアノの工房を開き、

1777年、最初のピアノを発表します。**エラールピアノの創業**です。

しかし、周囲のやっかみにあい、ギルド(同業者組合)から外されてしまいます。当時ギルドから外れることは、職を失うことでした。S. エラールは職を続けるために、フランス王朝のマリー・

アントワネットにとり入り、多くのピアノをマリー・アントワネットに贈っています。それほど優れた腕で素晴らしいピアノをつくったといえるでしょう。

ところが、フランス革命が起こり、王朝に関わって、S. エラールも処刑されそうになります。逃れるために、当時のピアノ製造の盛んなイギリスに渡ります。そこでさらにピアノ製作を学び、研究を続け

エラールはイギリスでも確固たる地位を築きます。

1796年、パリに戻り、エラールはヨーロッパ最高のピアノメーカーにそだっていきます。

こうして **プレイエル**と**エラール**は、フランスの代表的ピアノメーカーとなっていきました。

ショパン 二人の歴史的ピアニスト リスト

歴史的2大ピアノメーカー、**プレイエル**を好んだ**ショパン**に対して、**リスト**は**エラール**を好んでいた。この事は、ピアノの持つ音色や構造上の特徴が、彼らの音楽性や個性において重要な意味を持つこととなった絶好の例である。

2つのアクション ～ その対照的な特徴 ～

エラールは、すでに1830年代に**ダブルエスケープメントアクション**(通称ダブルアクション)を発明していた。当時最先端のピアノで、後のスタインウェイに影響を与えたことでも知られている。この打弦機構は、現代のピアノに採用されている極めて重要な発明であった。それは、同音連打や速い

パッセージなどの名人芸的奏法を可能にし、当時としては大きな音量を誇る画期的な楽器であり大聴衆を相手に超絶技巧を繰り広げ、ピアノにおけるオーケストラ的な効果を求めていた**リスト**に

とって**エラール**は必要不可欠な楽器であったといえる。

それに対して、ショパンの好んだ**プレイエル**は、**シングルエスケープメントアクション**(通称シングルアクション)を搭載しており、構造上、必要以上の速いパッセージの演奏にはいささか不向きであるが、鍵盤が軽く、演奏法の限りを尽くせば、音にならない様な最弱音の打鍵でも敏感に反応して

極めて繊細な音色を引き出すことが可能な特徴を持っていた。ピアノに対して、より繊細なシンギングトーン(うたう様な音色)を探求していた**ショパン**にとって、プレイエルこそ必要不可欠のピアノに他ならなかったのである。

《サロン・ド・ノアン資料文より》



世界に誇り繁栄した、**プレイエル**、**エラール**はその後も、フランスの代表的メーカーとして残っていきませんが、第一次世界大戦、世界恐慌、第二次世界大戦、とりわけ米軍の爆撃により、

プレイエル社で

ストックしていた40年分の木材の焼失は決定的となりました。19世紀後半からのアメリカやドイツのピアノにおされ、大音量と音の輝きを求めて発展したモダンのピアノに席卷されていきます。

戦後、フランスの代表的ピアノメーカーである、エラール、ガヴォー合併、プレイエルも合併、倒産。

ドイツのシンメル社に買い取られたり、銀行の管轄下におかれるなどの運命をたどります。

この時をもって、本来のプレイエル、エラールの音は消えてしまったともいえます。

1990年、フランスの伝統産業のピアノ製造を復興させようと政府援助のもと、復活を果たします。

1996年、シンメル社からやっと商標を買い戻し、新生プレイエル社が発足しましたが、エラールは

名前さえ消えてしまいました。 **カフェ プレイエル所蔵二台のフランスアンティークピアノは** 住年の最もよき音と姿を今に伝えています。**エラール Erard No. 95465 (1909年)**

プレイエル Pleyel No. 174215

(1923年)

他にカフェ プレイエルには **吉岡弘司 作 スピネット (2002年)**

リードオルガン YAMAHA HAMAMATSU 型式12号 No 89955 (1909年 明治42年)

ZENOA ORGAN (詳細は不明) が所蔵されています。



Bentside Spinet Cembalo by YOSHIOKA

スピネット 2001年 吉岡 弘司 作

スピネットは16世紀～18世紀にヨーロッパで広く使用された家庭用小型チェンバロである。カフェプレイエル所蔵のスピネットは、吉岡弘司氏（安曇野市在住）が、現代において至高の音を再現し、理想のスピネットを製作しようと手がけた銘器である。

製作にあたり、一切の市販品や規格製品は使わず、長野県産材料を多く使い、約一年半を費やし、カフェプレイエル開店にあわせて、2001年に完成した。

木材は、しらびそ、さくら、ぶな、かえで、つが等を用い、鍵盤はシャム柿と象牙である。ボディ材は25年間乾燥させたチリ産の高冷地のさくらを使用するなど、ひとつひとつこだわって材質を選んでいる。

外装の漆は、吉岡氏自宅の庭で採取したものを加え、塗る筆まで自ら製作したものを使用している。響板に張られた弦は、金属の専門家である吉岡氏が、スピネットの高音域から低音域音に合うよう、それぞれに作ったものである。

このスピネットは、通常の昔のモデルより大きいのが特徴である。ジルバーマンを基本モデルにしながらも、吉岡氏がより音の豊かさを追求した結果である。しらびそ材の響板に空けられた音の抜けるローズとよばれる穴には、北アルプスの麓にふさわしく、波田から望む乗鞍岳が彫ってある。また置かれた状態では見ることができないが、楽器の後部から蓋にかけて金箔と銀箔が貼られている。十余年を経て銀は黒く変わり、金と黒の魔除けに因んでいる。その金箔、銀箔は蓋を開けて背面裏から見ると、槍ヶ岳の雄姿がイメージされたデザインとなっている。湿度によって埋め込まれた香木からの香りなど、様々なところに人知れぬ吉岡氏の楽器製作の真摯さをかいま見ることができる。

蓋を開けた内側前面には、ラテン語で彫られた美しい詞がこのスピネットの総てを物語っている。

Musica Donum Dei <英読み表記>

Mvsica Donvm Dei <ラテン語表記>

《 音楽は神の贈り物 》